言論の覚悟

鈴木邦男 Suzuki kunio

◉再審請求中！

「あの頃は刺激的で面白い討論番組が随分とありましたね。それも全国で」という話になった。二木啓孝さん（政治ジャーナリスト）と久しぶりに会って、そんな話になった。「あの頃」と言っても20年近く前だろう。「朝まで生テレビ」に刺激されたのか、大阪、名古屋、九州、北海道でも面白い討論番組があった。大阪では猪瀬直樹さんが司会する討論番組があって、「朝生」と張り合っていた。

朝日ニュースターでは、ばばこういちさんが司会する討論番組「ジャーナリズム最前線」「ぶっちぎりトーク」があって僕もよく呼ばれた。今でも覚えているが、皇太子さまと雅子さまのご成婚の日（93年6月9日）に、「今、日本の皇室を考える」特集をやった。天皇制はいらないという矢崎泰久さんと、必要だという僕が出て、二人だけで長時間、激論した。よくそんな企画が通ったものだと思う。今なら無理だろう。今のほうが言論は不自由だ。「こんなおめでたい日に、こんな討論をするなんて許せない。こいつらは不敬だ！」という抗議がドッと来た。

僕も一緒に「不敬」にされてしまった。

それと、印象に残っているのは東海テレビだ。「あれは面白かったね。蓮舫さんはあれで政治に目覚めたんですよ」と二木さんは言う。高野孟さんと蓮舫さんが司会をしていた。初めのタイトルは、「田原総一朗の世界が見たい！」だったが、田原さんが忙しくなり、司会の二人が中心の番組になった。そして、「週刊大予測！」になった。ということは、毎週やっていたんだ。

東海テレビのこの番組は、収録を東京でやっていた。東京タワーの傍の貸しスタジオだと思う。企画も凝っていたし、内容も濃かった。たとえば、漫画『沈黙の艦隊』がヒットした時は、「『沈黙の艦隊』は浮上するか」というテーマで防衛論をやる。漫画と現実とを往き来しながら討論する。また、逆説的な問題提起もあった。「日本は西洋の奴隷になれ！三枝成彰の洋魂和才のすすめ！」。この時、僕は三枝さんや新井将敬さんに初めて会った。

東海テレビでは二木さん、石川好さん、ビル・トッテンさん、グレゴリー・クラークさんなど多くの人と知り合った。政治家は新井さんだけだった。考えてみると「朝生」や大阪の討論番組、ばばさんの番組にしても、政治家はほとんど出ていなかった。政治家に頼らないという気概があった。また、政治家は政治をやってくれ、テレビに出てお喋りしてる暇はないだろう、と両者（政治家とテレビ局）は思っていたのだろう。

二木啓孝さんと（7月13日）

東海テレビで『世直し源さん』をテーマにした放送もあった。業田良家の漫画で、政治家ではない、腹巻き・下駄ばきの庶民・源さんが政治家を叱り、世直しをするのだ。僕が源さんに擬えられたが、とてもそんな力はない。それよりも、パネラーの皆が、また、テレビ局が、「政治家なにするものぞ」「われわれが源さんになる」という意識を持っていたのだろう。

全共闘出身者も頑張っていたし、作家、音楽家、評論家、市民運動家、ジャーナリストが元気だった。政治に頼らず、俺たちが国を変えるのだという意欲があった。ところが今では討論番組といえば政治家だけを集めてお茶を濁している。政治家ばかりに頼り切りだ。「世直し源さん」を目指した言論人も、どんどん政治家になってゆく。政治家にならないと「言論」は持てないと思っているのだろうか。

二木啓孝さんも、「政治家になってくれ」という誘惑も多いのだろうが、全て断っているようだ。毅然としているし、清々しい。

「二木さんと知り合ったのは『朝生』や東海テレビで一緒に出たからですよね」と聞いたら、「何言ってるんですか。35年前ですよ」と言う。「鈴木さんが新右翼としてデビューした時、原稿を頼みに行ったんです」と言う。74年に東アジア反日武装戦線〈狼〉の連続企業爆破事件があった。その事件を取材し、75年に僕は『腹腹時計と〈狼〉――〈狼〉恐怖を利用する権力』（三一新書）を書いた。初めての本だ。産経新聞を辞めたばかりで、僕も元気がよかった。「右翼も〈狼〉に学ぶべきだ」と過激なことを書いた。「右翼が左翼の爆弾闘争を支持した」と言われ、「新右翼」と呼ばれる理由にもなった。

この異色の新右翼に原稿を書かせようと、当時、月刊『情況』の編集部にいた二木さんが高田馬場に訪ねてきた。そうだったのか。二木さんに聞いて、やっと思い出した。二木さんはその後、『週刊ポスト』、『日刊ゲンダイ』を経て、今はフリーだ。二木さんは、7月13日（火）、一水会フォーラムの講師として来てくれた。「参院選後の政治動向を占う」と題し、講演してくれた。さすがに選挙や今後の政局については詳しいし、鋭い分析をする。終わって近くの居酒屋で二次会をした。その時、「朝生」や東海テレビの話になったのだ。

夜、家に帰ったら、「和歌山カレー事件」

タイトル写真＝キノウチユタカ

の林眞須美さんから本が届いていた。眞須美さんは去年、死刑が確定してからは面会も郵便もダメになった。面会は家族と弁護士だけ。手紙や本を送っても本人には届かない。「こんな人から手紙が来た」と、名前だけを本人に知らされるだけだ。

でも最近、林健治さん（眞須美さんのご主人）と養子縁組をした人がいて、その人を通じて僕は連絡が取れる。佐高信さんと僕の対談『左翼・右翼がわかる！』（金曜日）を読みたいというので送った。林浩之さん（養子になった人）は、「眞須美はとても喜んでいました」と言う。これを読んで左翼・右翼の違いも分かったし、その歴史・特色も分かって面白かったという。

そして今度は眞須美さんから本をもらった。神田香織さんの本で、『乱世を生き抜く語り口を持て――創作講談の創り方語り方』（インパクト出版会）だった。講談師・神田香織さんとは昔からの知り合いだ。どうしてこの本が、と思った。読んで分かった。神田さんは安田好弘弁護士からカレー事件のことを聞き、眞須美さんに興味を持ち、わざわざ面会に行っているのだ。さすがは行動派の講談師だ。テレビも新聞もない時代は、講談師が真先に現場に行き、それを講談にして客に伝えた。講談師こそが元祖ジャーナリストだった。

面会に行った神田さんは、すぐに意気投合。お茶目で、喋り好きだし、芸人向きだと見抜いて、眞須美さんの入門を許可。獄中なので、「外神田」一門になった。この時の面会の様子が本に詳しく書かれている。そして……。

〈最後に「なんでも聞いて」と切なる願い。思わず「今の体重は？」と聞いたら「それだけは勘弁して～」〉

なかなか面白い本だ。よし、18日（日）はこの話をしよう。そう思った。7月18日は大阪・御堂会館A展示室で眞須美さんの支援集会がある。「和歌山カレー事件。ただいま再審請求中！」だ。この日の講演は森達也さんだ。僕は「林眞須美さんを支援する会」代表になっているから最後の挨拶をする。その時に、神田さんの話をしよう。次の集会の時はぜひ、神田香織さんに記念講演をしてもらったらいい。そして「冤罪・和歌山カレー事件」の講談をつくってもらったらいい。冤罪をあばく。そして、「悪女」ではなく、かわいい、華麗な眞須美さんの不屈の闘争を講談でやってほしい。18日は、そんな提案もしよう。そう意気込んで大阪に行った。

ところがだ。7月18日、会場に着いて驚いた。当の神田香織さんがいる。あれ？どうして。「昨日と今日、大阪で仕事があって。今日だけ空いてたのよ」と言う。嬉しいけど話のネタがなくなった。実際、森さんの講演の後、神田さんが挨拶。眞須美さんと初めて会った面会のこと。体重を聞こうとしたこと。入門を許可したこと。全て話しちゃった。さらに、眞須美さんと子供たちの愛情をミニ講談にまとめてやる。

終わって、「今度はもっと長い本格的な講談を作りますよ」と言っていた。それは楽しみだ。「アルバムを整理していたら17年前の屋久島の写真が出てきたよ」と神田さん。「何ですか、それ」「ピースボートの日本クルーズで屋久島に行ったでしょう」。そうか、17年前か。

神田さんは5歳の娘さんを連れてきていた。その娘さんは今、22歳で学生だ。

屋久島に上陸したことは覚えているがそれまでの船の記憶がない。何せひどい船酔いで、ずーっと寝ていた。「右翼のくせにだらしがない」と皆に馬鹿にされたが、思想とは関係ないだろう。

眞須美さん支援集会に話を戻す。森さんは『死刑』（朝日出版社）を書き、死刑制度には詳しい。ヨーロッパの刑罰なども例にひきながら話す。そしてカレー事件について。深い話だった。1時間10分の予定だったが、「10分早く終わったので、この10分は鈴木さんにあげます」。申し訳ない。

神田香織さんと（7月18日）

森さん、神田さんの話の後に、再審弁護団からの再審請求報告。安田、高見秀一弁護士が詳しく報告する。目撃証人、毛髪鑑定書の杜撰（ずさん）さを暴くべく再鑑定の請求を行っている。大変な作業だ。終わってから会場から質問が出る。

その後、僕の挨拶だ。持ち時間は10分だが、森さんから10分もらったので、20分喋った。林浩之さんに聞いたら、眞須美さんは、朝から晩まで死刑を考えている毎日だという。残酷だ。証拠もない、自白もない。それでも死刑確定だ。何とか無罪を証明し、奪還しなければならない。今、日本で死刑確定者は109人だ。強盗殺人、強姦殺人など、弁護の余地がないと思われる人、支援者もいなくて、本人も悟り切り、「受け容れ準備」が出来た人から順に執行されているという。安田弁護士に聞いた話だ。

眞須美さんは証拠も自供もない。「おかしい」と思う人が多い。また、これだけ支援者もいる。法務大臣も簡単にハンコは押せないだろう。そして、再審請求で、釈放を勝ちとる。その為にも集会だけでなく、マスコミにも訴えて状況を変えていこう、と話した。二次会の時、さらに奪還策を話し合った。

死刑の時効は15年だ。もう3年でカレー事件は時効になる。そうしたら真犯人は名乗り出るかもしれない。週刊誌や月刊誌に働きかけて手記を載せてもいい。「でも死刑の時効は廃止されましたから」と安田弁護士。だったら、支援者からのカンパを一億円集め、「眞須美さん基金」をつくる。それを提供するから真犯人は名乗り出てくれ、と言う。事業で失敗しているとか、健康面で先がないと思ったら申し出を買って出るかもしれない。また、真犯人に殺意はないのかもしれない。単なるイタズラのつもりでカレーに砒素を入れて、大変なことになったと思っているのだろう。それなら傷害致死で、もう時効になっている。「しかし支援者が真犯人を探す必要はない」「疑わしきは罰せずなんだから」「再審請求に賭けよう」……と、議論、提案が百出した。

鈴木邦男　43年生まれ。99年まで新右翼「一水会」代表。著書『公安警察の手口』他。近著『失敗の愛国心』『右翼は言論の敵か』。